

二匹の猿の物語（この物語は、今昔物語や法華経験記などに載っているものです）

昔、越後の国の乙寺に一人の僧がいて、毎日法華経を読誦していた。ある時から、二匹の猿が毎日堂前の木に登って、僧の読誦を聞くようになった。猿が毎日来るようになってから三か月ほど経ったある日、僧は猿に問いかけた「お前たちは法華経を読誦したいのか？」と聞くと、猿が首を横に振ったので、僧は「経を書写したいのか」と聞くと、猿が喜んだそぶりをした。「それでは私がお前たちのために書写してやろう」と言うと、猿は喜んで木から降りて帰って行った。その数日後、数百匹の猿が木の皮をたくさん持ってきた。

僧が、この木の皮に法華経を書写し始めると、二匹の猿は、そのお礼に毎日、山芋や栗や柿などを持ってきた。僧が最終の第5巻を書き終える頃、二匹の猿が二日間ほど来なくなった。僧は不審に思い、寺の近辺をさがすと、二匹の猿が頭を土の中に突っ込み、脚を逆さにして死んでいた。猿の死体の近くには、山芋がころがっており、猿たちは穴の中に頭を突っ込んで山芋を掘っている最中に、地すべりが起きて生き埋めになったのであった。

僧は、二匹の猿の遺骸を川の兩岸に埋葬したという。その由来で川の名前が猿又川と呼ばれている。その猿の縁をもって、僧はこの地に寺を建てて供養したのが、猿供養寺である。

<解説>

この物語は、奈良時代の話だといわれている。この地域に丈ヶ山という標高571mの小さな山があるが、その山の近くには清水が湧きだし、聖なる山と崇められて、修験道の聖地でもあった。奈良時代から平安時代にかけて、その丈ヶ山を中心に、山寺三千坊と呼ばれるほど多くの寺が建てられ、仏教が栄えていたと云われている。

地すべり資料館の隣の小屋に、二猿物語と人柱伝説の人形が展示してある。二猿物語は、人間の足が4本逆さになって地面から出ているものである。物語では猿となっているが、もちろん生き埋めになったのは、猿ではなく人間である。古代の人々は、人間未満のものを猿と呼んで蔑んでいたため、農耕をせずに山の中で暮らし租庸調の義務を果たさない人たちのことを、村人たちは馬鹿にして猿と呼んでいたのであろう。